

3 精神科慢性期病棟における看護師が認知する看護ケアの魅力 —看護ケアから見えるヒューマンケアリング—

○木村 美智子（関西福祉大学看護学部）

I. はじめに

社会的入院などの慢性期状態の精神疾患患者に対しては、見通しが持てないことや充実感、やりがいがないなど看護師が無力感に陥りやすいという状況がある（倉持 2006）。しかし、患者との関わりがじっくりできる、「ほっとする」という看護師がいる。こういった看護師が認知している精神科慢性期病棟の看護ケアの魅力抽出の中で、看護ケアの魅力を感じるという看護師と患者とのかかわりにヒューマンケアリングの様相を見出すことができたので報告する。

II. 研究方法

調査対象は、東北、中国地方の民間精神病院 5 施設で、精神科看護経験が 5～32 年の精神科慢性期病棟で働く看護師 19 名である。データ収集・分析方法は参加観察および半構成的面接を行い、看護ケアの魅力を表している部分を抽出し分析した。用語の定義として、看護ケアの魅力を見出す看護師が患者とかかわる過程での、面白さ、興味、関心、充実感、やりがい、自尊心、達成感とした。研究期間は、2008 年 11 月～2010 年 1 月。本研究は、日本赤十字広島看護大学大学院看護学研究科看護研究倫理委員会の承認を得て行った。

III. 結果

看護ケアの魅力は 3 つの《カテゴリー》と 10 の〈サブカテゴリー〉で構成された。カテゴリー 1 では、看護師は《社会復帰に向けての要としての存在》として、①〈繋げる他職種間の拠点〉、②〈患者と家族を取り持つ緩衝役〉、③〈看護師主導の主治医との協働〉、④〈病棟生活と地域生活の架け橋〉、⑤〈スタッフと共に歩む看護ケア〉となっていた。カテゴリー 2 は、さまざまな看護ケアを駆使し患者と関わり合うことで《諦めの中に見る患者の変化》であり、それは⑥〈思いもよらない潜在能力の発見〉、⑦〈かたくなに閉ざされた心の開放〉、⑧〈緩やかに広がりを見せる日常生活〉であり、患者の行動に変化が生じたことを示した。カテゴリー 3 は、こうした患者とのかかわりの結果、相互作用として看護師は⑨〈全身にエネルギーが染み渡る充足感〉や、⑩〈患者を通して知る自己成長の実感〉を感じ、《満たされる思いによって沸き起こる看護への熱意》を感じていた。

看護師は、《社会復帰に向けての要としての存在》という看護の魅力を通して、「医療と保護」と「地域生活中心」の看護ケアとの違いを実感し、さまざまな職種や看護師スタッフ、家族に対して、相手の心の様相などの特徴を捉えながら関わっていた。また、患者に対しては、日常生活援助を通じた関わりの中から、患者の変化を捉えることのできる鋭い観察力と感受性を持ち、自己を看護ケアの道具として関わっていることで、看護ケアの魅力を感じていると推察された。

IV. 結論

これらはワトソンの 10 の主要なケア因子（ケア・プロセス）と重なり合い、お互いの心が触れ、双方の経験や感情を共有し、魂の奥深いところで通い合うというトランスパーソナルなケアを示し、看護ケアの奥深さに触れていたことが見出された。